

問一

ア

寄与

イ

照準

ウ

阻害

エ

森羅

問二

様々なテーマが混在する棚から本を選ぶことや、カウンターで職員と会話をし、本を推薦されて新しい発見を得たり、情報を探すプロセスを自ら体験したりするなど、一見非効率に思える事柄や体験。

問三

(1)

影響力を強めている。

(2)

人から人への知識の伝達や双方向のコミュニケーションを促し、人の好奇心や行動意欲を掻き立てるといふ、公共的な意義。

問四

人の頭の中、元する機能

問五

「必要」という欲望にこたえる場所として人々が図書館を訪れ、自ら求めた本に向き合い、読み解くことで、知識に向き合う態度が受動的なものから能動的なものへと変化できるような形で、国民の教育と文化の発展をもたらすこと。

問六

「文章I」では来館者の目的が変化している現状を踏まえ、インターネットでは得られない体験や交流の「場」としてアイデアや思考を社会に還元する形で進化すべきと考えているが、「文章II」では教育文化施設という本来のあり方に基づき、森羅万象の書物や情報の提供を通して各人の知に對する能動性の「掘り所」となるべきと考えている。(156)

合計点

氏名

受験番号

二 国語 解答紙 (その二)

問一	①	時政(北条)	②	継母の女房(女房)	③	姫(万寿、姫君、北の方)
問二	a	はかなけれ	形容詞	b	め	助動詞
問三	(1)	自分が都で平兼隆を政子の婿としたことと、政子が伊豆で頼朝を婿としていたこととの間。				
問三	(2)	由緒ある平家の一門である兼隆からは伊豆の国の政務を任せてくれる約束をもらっており、一方の頼朝はかつて先祖の時代に源氏を婿に迎えた際に家系が栄えた例と同じように、一族が繁栄する期待もでき、また姫君の愛情も深いと考えられるから。				
問四	(3)	自分の屋敷に帰るのではなく兼隆とともにいったん伊豆の国府にとどまり、兼隆には何も知らないふりを装ってもてなし、姫君をその場へ呼び出そうとした。				
問五		姫を父の時政が定めた結婚相手である兼隆のもとへ追いやれば、自分の娘を代わりに頼朝と結婚させられるだろうと考えたから。				

問一	①	よりて	②	いよいよ	③	すなはち	④	なす
問二		何ぞ我が母を殺す(や)。当に母の為に讐を報ずべし						
問三		四十里四方の町がすべてあつという間に陥没して湖となった。						
問四		町全体を沈めたのは自分を養って育ててくれた老婆を殺した県令への復讐のためだったから。						
問五		風がなく水が澄んでいる時には、城郭の櫓が整然と並び立っている様子まで見えるほど、湖の底に当時のままの姿で沈んでいた。						

氏名

受験番号

合計点